〔日本書紀二十九天武〕四年九月丙戌、自筑紫貢唐人三十口、則遣遠江國而安置、

〔續日本紀二十三淳仁〕天平寶字五年七月辛丑、遠江國荒玉河堤決三百餘丈、役單功三十万三千七百餘人、苑粮修築、

〔皇年代略記後柏原〕永正七年八廿七、遠州今切崩出云々、

〔笈埃隨筆八〕遠江濱名

あふみは都に近き江といひ、遠江は都に遠き江と有を以て、國號とす、然るに貝原篤信の大和本草に見ゆ、後土御門院明應八年六月十日或ハ九月大地震動夥しく洪水して、其江湖の水涸て陸となり、湖口切れて入海となる、今切の渡り是なり、荒井宿の町はづれに濱名の橋の跡あり、一説には、人皇百三代後柏原院永正七年の洪水ともいふ、三代實錄に曰、元慶八年九月朔日、遠江國濱名橋長五十六丈、廣壹丈三尺、高一丈六尺、貞觀四年修造、歷二十四年既以破壞、勅給彼國正稅稻一萬二千六百三十束、改造焉と、海道は本坂越として今も有なり、

汐みてる時に行かふ旅人や濱名のはしと名付そめけん

○按ズルニ、今切渡ノ事ハ、渡篇遠江國荒井渡條ニ詳ナリ、

〔萬葉集十四東歌〕相聞

阿良多麻能、伎倍乃波也之爾、奈乎多氐天、由吉可都麻思、自移乎佐伎太多尼、伎倍比等乃、萬太良夫須麻爾、和多佐波太、伊利奈麻之母乃、伊毛我乎杼許爾、

右二首遠江國歌